

2019年 七ヶ浜町 音楽アウトリーチ事業 報告書

申請者名 七ヶ浜国際村事業協会

推薦者名 (株) ジャパン・アーツ

1. 事業概要

① 仲道郁代 音楽ワークショップ

主催： 七ヶ浜国際村

日程： 2019年12月17日（火）～12月19日（木）

会場： 七ヶ浜町立松ヶ浜小学校（17日）

七ヶ浜町立亦楽小学校（18日）

七ヶ浜町立汐見小学校（19日）

対象： 小学校6年生 各クラス（計164名）

② セブンハマーズピアニストⅦ 仲道郁代とみんなの発表会

主催： 七ヶ浜国際村

日程： 2019年12月18日（水）

会場： 七ヶ浜国際村ホール

対象： 七ヶ浜町周辺在住のピアノ愛好家 15名（8歳～52歳）

2. 実施の背景

宮城県七ヶ浜町は、仲道がデビュー間もなくから親交を深めてきた特別な町である。文化創造の拠点である七ヶ浜国際村では、25年以上に渡り毎年コンサートを行っている。

2011年の東日本大震災で、七ヶ浜町は甚大な被害を受けた。仲道は震災時に小学校在学中であった町内の子どもたち全員を対象に、2012年から6年をかけて、毎年6年生の各クラスへ音楽アウトリーチを実施し、子どもたちに音楽で寄り添ってきた。

6年間の事業が終了した後も、七ヶ浜町から「引き続き全小学校を対象に音楽アウトリーチを行って欲しい」との要望を頂き、七ヶ浜国際村主催として継続している。引き続き、子どもたちと深く丁寧に音楽を分かち合う時間を紡ぐとともに、事業をより有意義なものとするため、効果の検証と改善を進める。

3. 事業のねらい

① 仲道郁代 音楽ワークショップ

『聴くっておもしろい!』をテーマに、仲道のピアノ演奏を「よく聴く」ことを通じ、自分の中の細やかな感受性の扉を開くことを目的とする。

「よく聴く」とは、自らの感受を他の対象（音楽の中の子ども、数字、色、味）に

投映する活動等をきっかけに、自分自身の細やかな感性を見つめ、顕在化するとともに、他者と感受を共有し、その多様性を実感することを指す。

お互いの差異を認め合い、感受を深める活動を通じて、他者に思いを寄せることから生み出される力を認識し、豊かな想像力を育むことを期待する。

② セブンハマーズピアニストⅦ 仲道郁代とみんなの発表会

ピアノを愛する七ヶ浜町周辺の人々が集い、仲道郁代からのワンポイントアドバイス付きの発表会を行うことで、音楽を通じた七ヶ浜町とのつながりを深めるとともに、ピアノ演奏を通じて、思いを表現する喜びを、さらに実感できる機会とする。

4. 事業内容

① 仲道郁代 音楽ワークショップ

- ・17日 七ヶ浜町立松ヶ浜小学校 6年1組(23名) / 2組(23名)
- ・18日 七ヶ浜町立亦楽小学校 6年1組(34名)
- ・19日 七ヶ浜町立汐見小学校 6年1組(29名) / 2組(27名) / 3組(28名)



◎導入 エアピアノから「想像」して聴く 【12分】

♪ショパン： エチュード 《革命》

♪シューマン： 子どもの情景 より《トロイメライ》

人が表現するときには、そこに伝えたい思いがある。まずは、集団のセーフティ（個人による違いを認め、安心して対話できる環境）を構築した後、表面的な演奏風景の印象（すごい・かっこいい等）の先にある、音楽表現そのものを見つめることを目指す。

あえて音のない状態を作り出し、児童の想像力のスイッチを入れた後、音を出した状態と比較することで、感受を焦点化し、「よく聴く」活動へと導入する。

ワークショップが始まると、スタッフの誘導のもと、ピアノの鍵盤が見える場所に集まる。まず、仲道が数人の児童に協力を求め、「好きな色は？」と質問する。児童が「青」「ピンク」「黄色」など答えると、「間違っただけを言ったのは誰？」と全体に問う。多くの児

童が戸惑いを見せると、「好きな色はそれぞれ自由。間違っているなんてないよね」と確認する。

これらの至近距離でのコミュニケーションを通じ、心理的バリアを取り除くとともに、自分の感受に間違いはないことを確認し、正解を求めようとする思考をほぐしていく。

エアピアノでは、音がない中で「何が聴こえてくる？」と児童に問う。児童は想像力を働かせ、ショパン《革命のエチュード》冒頭では、「怒り」「慌ただしい」などの意見が出た。その後実際の演奏を聴くと、音楽表現の迫力に児童の表情は集中し、「明るいと思ったら暗かった」「悲しさや怒りなどいろんな感情が混ざっている」「激しさの中で思いを吐き出している」など、その音に込められた思いを感じ取ろうとする様子がみられた。

同じく、シューマン《トロイメライ》では、エアピアノと実際の演奏を比較しつつ、「悲しそうだと思ったけれど、心が落ち着く感じ」「悲しくて弱気になっている」「静かな草原のようなイメージ」「ゆったり優しい」などの意見が出され、想像を次第に開いていった。

◎活動1 音楽の中の「他者」の思いに目を向けて聴く。【23分】

♪田中カレン： 光のこどもたち より《青い惑星》

活動1では、想像する対象をさらに焦点化し、音楽の中にいる「子どもの気持ち」とする。音楽を「よく聴き」、子どもの置かれた状況や、周囲の環境などを含め、多様な観点から想像を広げることで、自らの感受を深く見つめていく。

児童は紙とペンを受け取ると、次はじっくりと自らの感受に向き合うことができるよう、他者から離れた「自分だけの場所」を探し、教室いっぱいに広がって座る。環境が整うと、仲道は「これから演奏する曲の中には、小さなこどもがいます。この音楽を聴いているこの子は、どんな気持ちだろう。どんな様子だろう。」と、ゆっくりと語り、演奏した。

感受の言語化は、自己の内面を表出することに対する心理的なバリアが働く上、語彙が限定され一面的な見方になりやすいが、音楽の中に置かれた「仮定の他者」に投射することで、多様な観点から見つめることができ、繊細な部分のアウトプットも容易にしている。

仲道とファシリテーターは、音楽とその中にいる子どもに向き合う児童に寄り添い、時に質問を投げかけながら、それぞれの児童のアウトプットを受け止めていく。

何度か演奏を繰り返した後、児童の許可を得て、仲道が1人1人の想像した「子ども」を全体に向けて語り直す(Retell)。このとき、仲道の語り返しによる受容と、参加者全体の傾聴により、それぞれの感受がすべて認められていくのだ。

共有する中で、同じ曲を通じたワークでありながら、それぞれ音楽をどのように感じるかは違っており、感じているニュアンスも多様であることを知る。また、参加者がそれぞれ「他者」の気持ちを想像し、思いを寄せることができたことを確認する。

児童は「つらいことがあっても、それを乗り越える子ども。一人ぼっちになったが、誰

かに勇気をもらった。寂しい空間で、冬の寒いときに、誰にも会えない」「小学生の女の子。優しいけれど、みんなに言えない秘密がある。タンポポがたくさん咲いている庭にいて、タンポポのように強くなりたいと思っている」など、心の奥の思いにも触れていた。

◎活動2 多様な味わい方を通じて、細やかな感受性に気づく【32分】

♪田中カレン： 光のこどもたち より《青い惑星》

参加者全体でそれぞれの感受に寄り添い、その多様性を実感したところで、後半は同一のテーマに基づき、より細やかに味わい、感受を深める時間とする。

投映する対象は、(1)数字 1・2・3・4・5、(2)色 赤・青・黄・緑・白、(3)味 あまい・すっぱい・しょっぱい・にがい・からい、の3パターンである。選択肢の中から、曲にフィットするものを選び、周りに見られないように、3つ折りの紙に書いていく。同じ選択肢を選んだ人同士が集まり、小さなホワイトボードを用いながら、選んだ理由をシェアした。

「2という数字の形のイメージ」「中くらいの温度の感じだから3」「涙の青い色」「ブラックコーヒーのような苦さ」など、同じ選択肢の中でも多様な意見が飛び出し、また全体に共有するとさらなる多様性と意外な理由に、大いに盛り上がっていた。

「炎のような赤…そんなイメージではどうだろう」と、児童の感受を受けて、改めて仲道が演奏する場面もあった。個人の感受を深めつつ、多様な感受により、演奏がさらなる可能性を持つ様子を、児童は目前で実感していった。

◎まとめ【13分】

♪ショパン： 英雄ポロネーズ

今日の活動を振り返り、「よく聴く」活動として、①聴こえない音楽を想像したこと、②音楽から他者の気持ちを想像したこと、③様々な味わい方を他者と共有し、感受を深めたことから、ひとりひとりが細やかな感受性を持っているとともに、他者の感受をお互いに認め合ったことを確認した。

仲道は「他の人のことを細やかに想像し、思いを寄せることは、他の人を大切にすることになる。音楽の向こう側を想像することができたみんなは、他の人に想像を巡らせて、思いやることができる人だと思うよ」と語りかける。そして《英雄ポロネーズ》も、故郷の状況に思いを寄せるショパンの気持ち、また戦争時にも音楽に思いを寄せた人々の暮らしがあったことを話し、演奏した。

児童からは「言葉ではなく音楽で伝えられる気持ちもあると感じた」「若くして亡くなったショパンの思いを想像した」「音と心がつながっていて、訴えかけてきた」などの感想があり、それぞれに思いを巡らせながら聴いていた。

② セブンハマーズピアニストⅦ 仲道郁代とみんなの発表会

参加者は、参加歴や演奏曲目を仲道と語り、演奏を披露する。演奏後には、作品の背景や作曲家の特徴、より表現を豊かにするテクニックなど、参加者がより演奏表現を楽しむことができるよう、仲道から様々なアドバイスを受けた。

5. 今後の展望

東日本大震災からまもなく9年を迎え、現在の小学生は、震災当時の記憶は既に希薄となっている。未災世代との狭間にあり、被災地の明日を担う上で、他者に心を寄せ、言語では伝えきれない「思いを想像する」ことから生まれる力は、復興を越えて、まさに未来をひらく基盤となるだろう。

また、個人の中においても、時と環境により感受は多様である。中学校音楽鑑賞教室や、成人式での演奏、毎年国際村コンサートと、折にふれて仲道のピアノ演奏に出会う機会のある七ヶ浜町において、継続的な取り組みが生み出す可能性をさらに検討したい。

6. 備考

- ・参加者 仲道郁代、高見秀太郎（ファシリテーター）、七ヶ浜国際村 職員
- ・見学者 2名（19日）
- ・取材 NHK 仙台放送局（19日）：同日「てれまさむね」他 ニュースにて放送
- ・事後 参加した教員・児童に対し、直後にアンケートを実施した。

文責／高見 秀太郎

【助成対象経費報告（一行3名）】（消費税込み）

●移動費 計 47,700 円

- ・東京・仙台往復 22,820 円×2名=45,640 円
- ・在来線 260 円+1,800 円=2,060 円

●宿泊費 計 45,090 円

- ・仲道郁代（ホテル一の坊） 10,230 円×1名×3泊=30,690 円
- ・江崎裕子（キャツスプラザ多賀城） 7,200 円×1名×2泊=14,400 円

●ピアノ調律経費 計 126,500 円

助成対象経費 計 219,290 円（うち支援申請額 190,000 円）